

文献紹介

リアルワールドデータに基づく小児アトピー性皮膚炎患者の2型炎症疾患合併状況

アトピー性皮膚炎(atopic dermatitis: AD)患者において、喘息やアレルギー性鼻炎、食物アレルギーなどの2型炎症疾患の発症リスク上昇は以前より指摘されていた。しかし、医療機関データベースなどで収集される実臨床の情報「リアルワールドデータ」を用いた大規模な研究は行われていなかった。そこで、米国の大規模医療機関データベースを用いて、小児AD患者における2型炎症疾患の合併状況を調査した。

対象患者は小児AD患者が約24万人、平均年齢6歳、対照群として非AD患者が約24万人、平均年齢6歳が設定された。これらの患者群において、アレルギー性鼻・結膜炎、蕁麻疹、喘息、好酸球性食道炎、慢性副鼻腔炎・鼻茸の合併状況を評価した。AD患者群では非AD患者群と比較し2型炎症疾患の有病率は有意に高く、特にアレルギー性鼻炎、蕁麻疹、喘息、好酸球性食道炎で高い傾向にあった。また、治療内容に基づいてAD患者を重症度分類し比較したところ、重症患者群では軽症患者群と比較し2型炎症疾患の有病率がより高く、喘息では4倍以上、慢性副鼻腔炎・鼻茸、アレルギー性鼻炎、好酸球性食道炎では2倍以上に高かった。小児AD患者の症状が重症であ

るほど、2型炎症疾患の有病率が高い傾向があることが明らかとなった。臨床医はADとその併存疾患について、多方面からアプローチして良好なコントロールを図る必要があることが示唆された。

本研究の問題点として、利用したデータベースはレセプトデータが主体のため、ADの重症度に関する情報が乏しく、治療内容によって代替的に重症度分類を行った点が挙げられる。また、「湿疹」「アトピー性皮膚炎」など同じ疾患でも複数の病名が混在していること、12か月と観察期間が短いことが懸念点と考えられた。一方で、リアルワールドデータを有効活用することで、偏りのない実臨床に沿った情報を解析することができ、治療法や患者ケアの改善につながるヒントが得られる可能性がある。

Paller AS, et al: Prevalence of type 2 inflammatory diseases in pediatric patients with atopic dermatitis: Real-world evidence. J Am Acad Dermatol **86**: 758-765, 2022

(慶應義塾大学 川島 裕平)